

「教育方法・技術論」における協調自律学習のカスタマイジング

長尾 尚
市川 隆司
大阪信愛女学院短期大学初等教育学科
大阪信愛女学院短期大学人間環境学科

1. 学生主体の授業に取り組みを始めた動機

授業者である長尾は、勤務校において情報機器演習と保育者向けの英語を担当している。コンピュータの活用力や英語の運用力を修得するための授業である。教職科目として情報機器演習では、保育者に必要なパソコンの活用方法、特に教材や教具などの作品制作実習を中心に展開している。入学時の学生の操作スキルを見るとキーボードの入力速度の個人差は小さくなったが、他の操作スキルには学生間で大きなレベル差がある。英語に関しては、ほぼ一様に「英語」が嫌いな状態で短大に来ている。入学後に英語という「教科」と英語の「授業」についての好き嫌い調査を行っている。英語に対する好き嫌いは、半分に分かれるが、英語の授業に対しては、それまでの理解できなかった経験から「嫌いである」という学生が100%に近い。従って情報機器演習では、スキルの個人差をいかに吸収して授業を進めるか、また英語に関しても英語好きと答えた学生を授業で活かしながら、英語授業へのネガティブな姿勢をどのように変化させていくことが可能なかが課題であった。

情報機器演習は、2クラス（1クラスが15名程度）合同で30名程度の授業を展開するが、毎回、エクセルによる席替えを実施する。そのことで操作スキルの異なる学生が、混じり合うようにするためである。学生には、多様な友人とコミュニケーションをとれなくては、優れた保育者になれないと伝えられている。その上で授業中に質問や不明な点が出てきた場合には、基本的に臨席の学生、近くの学生に尋ねるように指導している。つまり担当者は、できる限り直接教えずに学習者間での相互協力を推奨しているのである。また英語の学習においても英語の好きな学生と嫌いな学生を組み合わせることで、学生自らが英語を書いたり話したりといった活動が、少しでも楽しくできる目的で数名の小グループ編成を試してみた。

このような経験から教師中心よりも「学習者中心の協調学習」を推進した方が、効果的な授業が可能になるものと考えようになった。

2. 実施に向けて準備したもの

関西大学での「教育方法・技術論」は、今年で3年目を迎えた。初年度は、3月の下旬に担当依頼があったために準備不足のまま授業を開始せざるを得なかった。翌年も継続して授業依頼があったのでウェブで「教育方法・技術論」に関する情報検索をしている時に、西之園先生が主宰される「自律協調学習のためのチーム学習」に巡り合えた。ウェブ上の教材を拝見したが、それをカスタマイズもできると知って早速「学習開発研究所」の会員になり、西之園先生の実践されている佛教大学における「教育方法・技術論」の授業方法について詳細な説明を受けた。そして頂いた教材資料に最低限必要な修正を加えたものを毎回の配布プリントとして学生に与えた。それ以外には、西之園先生の著書、「教育の方

法と技術」をテキストに指定した。実際の授業に向けて必要な準備物は、チーム数分のクリアファイル、発表時に使う模造紙程度であった。

3. 参考になったもの（Web ページ, 文献, 放送番組 等）

基本的には、学習開発研究所のサイトに挙げられている資料、文献などを利用させて頂いた。

4. 困った点, 困難だった点

一旦授業が始まると開始時の説明と終了時のまとめが、授業者の仕事である。しかし授業開始時までに配布プリントを準備して、それをチームの人数分だけ仕分けしておくなど、授業開始前に行う作業量が多かった。配布プリントは、B5サイズのルーズリーフ用紙に両面印刷を行い、学生が保存しやすく、いつでも参照できるようにしている。

学生が発表する機会は2度あるが、発表に利用する模造紙の保管に困ってダンボールに丸い穴を開けて、それに模造紙を丸めて立てる方法を思いついた。そのダンボール箱を学部事務室に保管してもらい、学生が必要に応じてチームの模造紙を受け取って発表の準備作業ができるようにしておいた。

2年目は、模造紙の代わりにプロジェクタを利用したいというチームが出てきたので、全て自分たちで機器の調達や準備ができるのであれば、利用を認めた。事務室にも貸し出し用のプロジェクタが数台用意されていることをこの時に知った。

およそ250名程度が収容可能な大教室での授業である。発表時には、全てのチームを3グループに分けて第1・2・3会場を設けて発表を行う。広い教室といえども他のチームの発表が、どうしても聞こえてくることになる。しかし実際に学校の学習環境の劣悪さについて説明することで、どのような環境においても教師の臨機応変な工夫と熱意によって授業空間を確保したり、より良い学習空間を創り上げることができると、新しい授業を作り出す原動力になると説明して、困難な状況を学生時代に経験しておくことが大切であると指導した。

5. 開始していつ頃から手ごたえを感じたか

手ごたえと呼べるような大きな反応を学生から見つけることは難しい。というのも2回目の授業からチーム分けしたメンバーで指定された場所にかたまっ座り、配布プリントに従って相談しながら話し合いを進めて作業に入るという流れは、毎回きちんと実行されているからである。そこで本当に学生の内面的な実態を知るには、アンケートをとるといった方法が必要となる。

C-Learningシステムには、ケータイから回答できるアンケートシステムが用意されている。この機能を使用して、授業の終わりに書き込んでもらって、掲示板に結果を提示したり、翌週の授業で紹介することが効果的である。アンケートを実施するタイミングと、どのような内容を尋ねていくべきなのかが、授業者にとっての大きな課題となる。

純粹にアンケートというよりも、彼ら自身が学習態度に変容を来した事実をフィードバックしてい

く材料としてとらえると、このアンケートを効果的に利用できる。しかしながらアンケートをとろうとしていた際に、携帯使用への不満の声が聞こえてきた。料金設定の違いからパケット定額制にしている学生は、気楽にケータイからウェブへのアクセスを行えるが、そうでない場合には少数だが料金が気になる学生がいることがわかった。そこでそんな学生には、友達のケータイを借りて回答してもらうように依頼した。さすがに授業へのケータイ利用そのものに対する抵抗感を持っている学生は、殆どいなくなっている。その利用が自らの学習に便利であれば利用への躊躇はなく、料金のことだけが唯一の問題になっている場合がある。

手ごたえとは、必ずしも受講生全員から感じられるものでもない。チームによってかなり差がある。一見するとどのチームも熱心に話し合いをしているようであるが、上級生の存在や性別の割合など、チームの雰囲気づくりに影響を与える不安定な要因が存在していることがわかった。それは、学生が直接に授業後に訴えに来たことからわかった。このような偶発的な要因は、予想しにくい。必ずしも上級生がチームに入ることはマイナスではない。これまでも上級生がうまくチームの活動をリードしてくれたり、教育実習での体験談をしてくれて参考になった、というような意見も聞かれたからである。基本的には、チーム内での役割を各自が実行して、コミュニケーションを円滑にとりながら活動を進められるかどうか重要である。その雰囲気を壊すような要因が出てきた場合には、チームとしての学習の質や効率が下がってくる、

そのことが端的に表れるのが、学習支援システムへの書き込み数とその内容である。不満を感じたり、ストレスを持った学生は、一般的にウェブへの意見表明の回数が減ったり、文章量が少なくなる傾向があるようだ。反対にチーム内での役割を全員が遂行していて、コミュニケーションが円滑に行われているチームでは、ウェブへの書き込みも頻繁となる。必ずしも長文での意見表明でなくても、途切れない言葉の掛け合いが続いているケースがみられる。また C-Learning では、チーム毎の発言数・書き込みの文字数が表示されるのでそれを授業時に学生に提示することは刺激になる。活発に利用しているチームの存在を示唆すると、そのチームのネット利用は益々伸びた。しかしながらうまく行っていないチームの書き込みがそれによって奨励されるかということ、必ずしもそうではない。学習支援システムの利用促進方法については、今後も大きな課題になると思われる。

6. 当初の計画と違った点

本年は、西之園先生からのアドバイスもあり授業記録を残そうと考えた。そこで授業中に学生の様子を見てくれたり、ビデオや写真の準備と実際の撮影をしてくれる T A (Teaching Assistant) を設けることにした。昨年は一人で授業を行っていたので、質問を受けたり、チームを回って様子を見たり、まとめのコメントを作成したりと忙しかったが、授業者以外に学生が気軽に尋ねることのできるスタッフが一人でもいることは、様々な有効性があると感じた。学生の中には、依頼心が強くすぐに授業担当者に頼って質問にくる学生がいるものである。しかし T A がクッションになって学生に再考を促す役目を引き受けてくれることなどもチーム学習にプラスになっていると思われる。但し、T A が、チーム学習に関心を持っていたり、学校現場で豊富な経験を有する場合には、特にその効果は大きいと考えられる。今回は、T A 自身がチーム学習という授業を初めて参観することで学生の主体的な学びを目の当たりにした結果、自らの授業観を見直すきっかけになったと語ってくれた。

7. 学生の反応

本年も「プリントを読んでも授業中にすることが理解できない」といった意見が、少数聞かれたが、昨年度と比べると非常に減っている。チーム内での新たな役割（音読確認）が増えたり、仕事内容を一層明確に説明した結果だと考えられる。最終レポートの感想では、多くの学生が苦しかったり挫折しかけたりしたが、チームメンバーに支えられて最後まで受講を続けることができ、結果的には、このような学習者中心の授業形態は、将来、教員になったときには有効であると感じていることがわかった。

8. カスタマイジングすべきだと感じた点

「教育方法・技術論」に関しては、教材が一層進化発展しており、特にカスタマイジングの必要は感じなかった。前述したようにチームでの各自の役割がより明確になった点が評価できる。具体的には、音読確認という係ができて、配布された資料の内容を確認する作業効果は高まった。また情報技術係が、学習支援システムである C-Learning の使い方について配布したスライドショーを元にチームメンバーに説明する時間を新たに設けたことも非常に効果があった。そのことは、今年度の学習支援システムの利用が高まっていることからもうかがえる。

9. どのような工夫をすれば学生の反応に変化が見られたか

学生は、自らのチーム内でのコミュニケーションが活性化して自分と違う考え方に出会い、そのことで自らのものの見方が広がったとか、ものを見る視点が変化したと感じた時にチーム学習の効果を最も体感するようであった。したがって指導者は、学生の変化が読み取れるような掲示板の記述などを取り上げて、時折チーム学習の意義をさりげなく示すことが大切ではないかと思われる。しかし実際には、授業時に自らの行為をメタ認知することは難しい。そこで最終回で「種明かし」と称して、それまで行ってきたチーム学習の枠組みについて説明・解説することで新しいタイプの学習の確認作業をすることが重要だと考えて実施した。併せて授業中に撮影した写真でスライドショーを作成して見せると、辛く感じたチーム学習も良い思い出に変わったようであった。